別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　　第　　号

氏　　名　　瀋　豊丹

論　文　題　目　　連用形が名詞化可能な語彙的複合動詞に関する研究

論文審査担当者

主　査　　名古屋大学　教授　佐久間　淳一

委　員　　名古屋大学　教授　斎藤　文俊

委　員　　名古屋大学　教授　宮地　朝子

別紙１－２

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

【本論文の概要】

本論文で論者は、日本語の動詞＋動詞型の語彙的複合動詞について、どのような条件の下で名詞への転成、すなわち名詞化が可能になるのか、その条件について考察し、名詞化できる語彙的複合動詞が持つ特徴を明らかにすることを目指した。

第 1 章序論では、本論文の目的を示すとともに、国立国語研究所が開発した『複合動詞レキシコン』に収載された語彙的複合動詞を考察の対象にすることを述べた。

第 2 章では、複合動詞の構成や意味に関する先行研究や動詞連用形の名詞化に関する先行研究を概観し、前項動詞と後項動詞の間に観察される他動性調和の原則や、語彙概念構造による前項動詞と後項動詞の意味関係、動詞から転成した名詞が表す意味の分類など、本論文の考察に関わる論点を明らかにした。

第 3 章では、『複合動詞レキシコン』に収載された語彙的複合動詞のうち、『Dual 大辞林』および『KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス』の双方で名詞化が確認できるものを考察対象とするとし、全 1594 語の収載動詞のうち、自動詞では 46 語が、他動詞では 223 語が対象となることを示した。

第 4 章では、上記考察対象の動詞について、前項動詞と後項動詞が他動性調和の原則に従っているかどうか調べたところ、原則に従う動詞が多く、名詞化できない複合動詞と比較しても顕著な差は見られないことがわかった。他方、原則には従わないが、後項に「込む」を持つ複合動詞は名詞化しやすいことも判明した。また、語彙概念構造に基づく前項動詞と後項動詞の意味関係について調べたところ、考察対象の動詞の中では「手段・原因」を表す動詞が多いこと、「並列関係」を表す動詞は名詞化しにくいことが示された。さらに、前項動詞と後項動詞のそれぞれが名詞化できるかどうか調べた結果、両方の動詞、とりわけ後項動詞が名詞化できる場合は、複合動詞全体も名詞化しやすいことが明らかになった。

第 5 章では、「込む」や「出す」「取る」など、生産性が高い後項動詞を持つ名詞化可能な複合動詞に注目し、その特徴を分析した結果、これら生産性が高い後項動詞の大半は「使役変化動詞」あるいは「変化動詞」であり、これらの動詞を後項に持つ複合動詞における前項動詞と後項動詞の意味関係は、「手段・原因」を表すものがほとんどであることを見出した。

第 6 章では、語彙的複合動詞が転成してできた名詞が表す意味について分析し、転成名詞が表す意味は、前項動詞と後項動詞の意味関係に関わらず、「動作そのもの」を表すことが最も多いこと、次いで、前項と後項の意味関係が「並列関係」、「手段・原因」、「補文構造」である場合は「動作の結果・産物」、「付帯状況」である場合は「動作の様態・状態」を表す場合が多く、「動作の場所」を表すことはほとんどないことを明らかにした。

第 7 章では、本論文の結論を述べ、今後の課題に言及している。

【本論文の評価】

単独の動詞であれ、複合動詞であれ、その連用形が名詞化できるものもあれば、名詞化できないものもある。また、名詞化できるものの中にも、ごく普通に使われるものから、実際には使われにくいものまであり、名詞化可能な程度は動詞によって異なっている。こうした名詞化の可否や名詞化可能な程度は、様々な要因によって決まっており、母語話者であればある程度の見当は付くものの、それを明確に述べることは日本語を母語とする専門家であっても難しい。特に、複合動詞の名詞化は、単独の動詞に比べて関係する要因も増えるため、その解明はさらに難しい課題と言える。本論文の論者は日本語の母語話者ではなく、母語話者にとっても容易ではないこの難題に敢えて挑戦したことは、それ自体、論者の意気込みを示すものとして評価しなければならない。また、多面的な考察の結果、名詞化できる複合動詞に関して一定の知見を導き出したことは高く評価できる。とりわけ、複合動詞が表す意味の側面から、どのような意味を持つ複合動詞が名詞化しやすいかに関する傾向を明らかにしたことは注目すべき成果と言える。他方、複合動詞の名詞化が、必ずしも、名詞化する、しないの二者択一でないことを踏まえれば、名詞化可能な範囲を知る上で、名詞化しようとすればできないことはない、といった事例についても、検討する必要があると思われるが、その点に関する考察は十分とは言えない。

そのことと関連して、本論文では、取り扱う転成名詞を、辞書に立項され、コーパスでも確認された場合に限定しているが、存在が確実なものに対象を絞り込みたいという意図は了解されるものの、辞書に立項されていなかったり、コーパスで確認できなかったりするものであっても、名詞化できないと断定することはできないので、より広い対象について考察することも必要だと思われる。また、論者は、名詞化できる複合動詞と名詞化できない複合動詞を比較して、前者の特徴を明らかにしようとしているが、そのこと自体は必要なプロセスであるものの、両者の境界がはっきりしない以上、どのようにすれば適正な比較ができるかについても課題がある。

もっとも、論者が典拠としている『複合動詞レキシコン』に載っている複合動詞だけでも 1594 語あり、これらの動詞一つ一つについて、名詞化できるかできないかだけでなく、名詞化の可能性の程度まで判別した上で考察を行うことは、たとえそうすべきであったとしても現実的とは言えない。まして、論者は母語話者ではないため、仮に母語話者の助けを借りたとしても、母語話者自身にとっても判断が難しい以上、名詞化の可能性の程度について微妙な判断を行うことは困難と考えられる。つまり、上で述べた課題や問題点は、複合動詞の名詞化という研究課題が本来的に持つ難しさの現われであると言うことができ、こうした課題や問題点があるからと言って、本論文の価値が損なわれるわけではない。よって、審査委員一同一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。